

# 史跡 慈照寺（銀閣寺）旧境内

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報  
二〇〇三  
一

史跡  
慈照寺（銀閣寺）  
旧境内

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人  
京都市埋蔵文化財研究所

# 史跡 慈照寺（銀閣寺）旧境内

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平米から、数千平米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび整備事業に伴います史跡 慈照寺（銀閣寺）旧境内の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

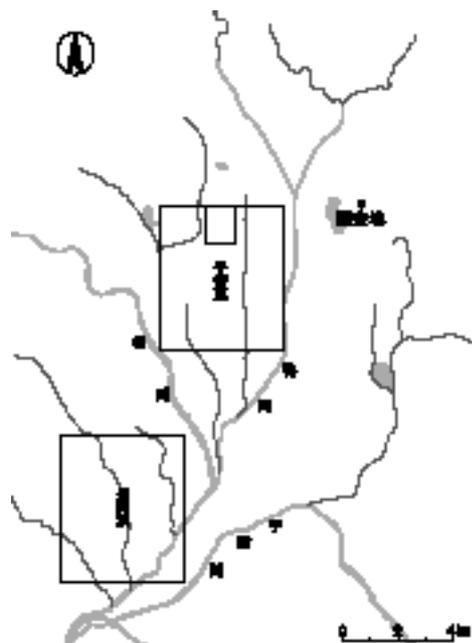
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

平成15年7月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 川 上 貢

# 例 言

- |            |   |
|------------|---|
| 1 遺 跡 名    | 史跡 慈照寺（銀閣寺）旧境内                          |
| 2 調査地点所在地  | 京都市左京区銀閣寺町 慈照寺境内                        |
| 3 委託者及び承諾者 | 宗教法人 慈照寺 代表役員 有馬頼底                      |
| 4 調査期間     | 2003年3月3日～2003年6月10日                    |
| 5 調査面積     | 97.2㎡                                   |
| 6 調査担当職員   |   |
| 調査担当       | 高橋 潔・近藤知子                               |
| 写真撮影       | 村井伸也・幸明綾子                               |
| 基準点測量      | 宮原健吾                                    |
| 7 使用地図     | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「吉田」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系    | 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）       |
| 9 使用標高     | T.P.：東京湾平均海面高度                          |
| 10 使用基準点   | 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。         |
| 11 使用土色名   | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版 標準土色帖』に準じた。      |
| 12 遺構番号    | 調査中に付した遺構番号を、本書作成に当たり整理して付け直した。         |
| 13 遺物番号    | 本書掲載の順に通し番号を付した。                        |
| 14 整理作業    |   |
| 担当職員       | 高橋 潔・近藤知子                               |
| 遺物写真撮影     | 村井伸也・幸明綾子                               |
| 15 編集・執筆   | 高橋 潔・近藤知子                               |
| 16 執筆分担    | 高橋 潔：1・3・5<br>近藤知子：2・4                  |



（調査地点図）

# 目 次

1 . 調査経過	1
( 1 ) 調査に至る経緯	1
( 2 ) 調査の経過	2
2 . 調査地の位置と環境	3
( 1 ) 歴史的環境と立地	3
( 2 ) 既往の調査	4
3 . 調査の概要	7
( 1 ) 層 序	7
( 2 ) 江戸時代後期以降	9
( 3 ) 江戸時代初期	11
( 4 ) 室町時代後期	12
( 5 ) 平安時代後期	14
4 . 出土遺物の概要	15
( 1 ) 土器類	16
( 2 ) 瓦 類	18
( 3 ) その他	18
5 . ま と め	19

# 図 版 目 次

図版 1	遺跡	1	調査地点遠景（東から）
		2	A区 解体前中門（西から）
図版 2	遺構	1	A区 調査前基壇全景（西から）
		2	A区 第2面全景（北西から）
図版 3	遺構	1	A区 第3面全景（北西から）
		2	A区 第4面石列SX15（北西から）
図版 4	遺構	1	B区 第1・2面全景（北から）
		2	B区 石敷SX17（北東から）
		3	B区 石敷SX17（南西から）
図版 5	遺構	1	A区 第5面石積SX22・溝SD23（南西から）
		2	境内南斜面に露出する石垣（南東から）

- 図版 6 遺物 1 A区第4面整地層出土土器  
 2 A区SX22・SD23出土土器  
 3 A区第3面整地層出土土器
- 図版 7 遺物 1 A区SX22・SD23出土輸入白磁  
 2 A区出土鋳型  
 3 A区出土軒丸瓦
- 図版 8 遺物 A区出土軒丸瓦・軒平瓦

## 挿 図 目 次

図 1	調査位置図 ( 1 : 2,500 )	1
図 2	A区 基壇敷石取上げ作業 ( 北東から )	2
図 3	B区 調査前全景 ( 南から )	2
図 4	1986年調査 全景 ( 北東から )	4
図 5	既往調査区および本調査区位置図 ( 1 : 1,000 )	5
図 6	1993年調査 石垣を伴う石組み溝 ( 西から )	6
図 7	1993年調査 石製の導水施設 ( 西から )	6
図 8	1993年調査 石敷きの暗渠 ( 南西から )	6
図 9	A区 調査区中央セクション断面図 ( 1 : 50 )	8
図10	A区 調査区北壁断面図 ( 1 : 50 )	8
図11	A区 第1面中門基壇平面図および調査区位置図 ( 1 : 80 )	9
図12	A区 石敷SX7 ( 北西から )	10
図13	A区 第2面遺構実測図 ( 1 : 80 )	10
図14	A区 第3面遺構実測図 ( 1 : 80 )	11
図15	A区 第4面西半部遺構実測図 ( 1 : 80 )	12
図16	B区 遺構実測図 ( 1 : 80 )	13
図17	A区 第5面遺構実測図 ( 1 : 40 )	14
図18	A区 出土土器実測図 ( 1 : 4 )	16
図19	A区 出土軒瓦拓影・実測図 ( 1 : 4 )	17
図20	鋳型実測図 ( 1 : 4 )	18
図21	1994年調査「試掘3」検出石列 ( 西から )	19
図22	『元文三年四月慈照寺修理願付図』	20

# 表 目 次

表 1	遺構概要表 .....	7
表 2	遺物概要表 .....	15



# 史跡 慈照寺（銀閣寺）旧境内

## 1. 調査経過

### (1) 調査に至る経緯（図1）

調査地は、京都市左京区銀閣寺町の慈照寺、通称銀閣寺の境内にあたる。当地は「慈照寺（銀閣寺）旧境内」として国の史跡に指定されている<sup>1)</sup>。この境内における整備事業の一環として、中門の解体・新築と、参道を挟んだ西側の竹藪部分にトイレ・売店新築が計画された。現状変更にあたり、慈照寺境内整備委員会では下層遺構の調査の必要が検討され、京都府教育庁教育委員会文化財保護課および京都市文化市民局文化財保護課の指導のもと、(財)京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を担当することとなった。

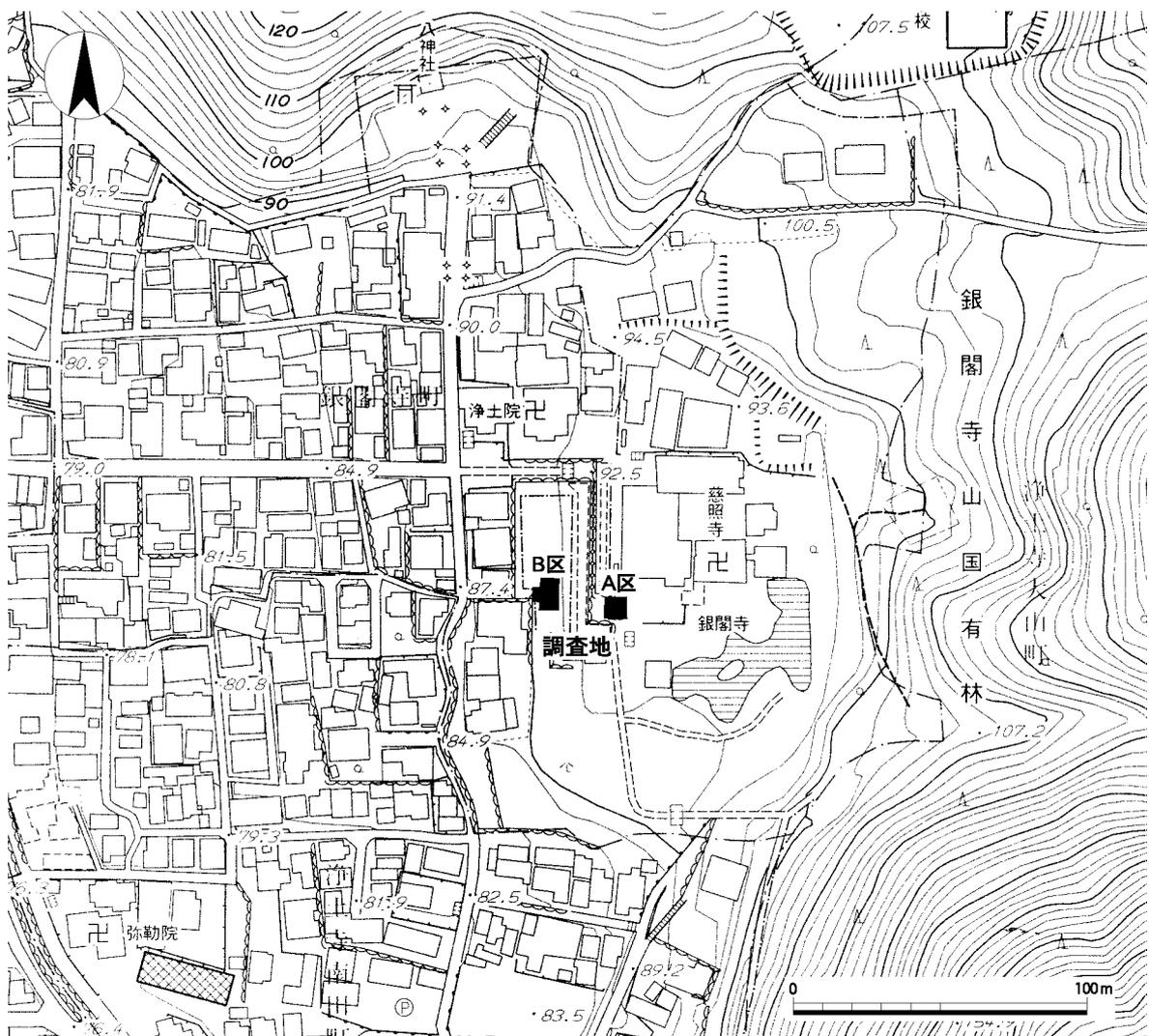


図1 調査位置図（1：2,500）

## (2) 調査の経過

調査区は調査地点が二箇所に分かれたので、中門部分をA区、竹藪部分をB区とした。調査は平成15年(2003)3月4日からA区を先行して開始し、B区の調査は4月14日に開始した。

A区では解体された中門の基壇構築状況とその時期を明らかにすること、下層に先行する門の遺構が遺存しているかどうか、さらにそれ以前の遺構・遺物の有無を確認することを目的とした。B区では既往の調査成果より、地表下1m程度で室町時代・東山殿造成時の整地層が検出されることが予想されたため、整地層および遺構の検出、さらに下層遺構の検出などを目的とした。

A区では掘り下げを行う前に、上屋解体後の中門基壇の写真撮影(図版2-1)と平面図実測を行い、現況の記録を作成した。上面の高さが揃えられている基壇と参道の関係を確認するため、まず基壇西側参道部分の掘り下げを行った。続いて基壇の敷石類(敷居石・葛石・敷石)の取上げ(図2)・整地層の掘削を行ったが、当初北半部分を先行させ基壇の構築状況を確認したのち、調査範囲を全面に広げた。基壇に使用されていた敷石類については、一石ずつ取上げ時に番号を付け、その使用箇所・方向の記録を行った。基壇敷石を除去した地表下0.2mで江戸時代初期、室町時代後期の遺構を良好な状態で検出したため、その後の調査はこれらの遺構の保存を前提として、西半部を中心に進めることになった。また、遺構の広がりを確認するため、調査区外に小規模な拡張区を設けた。なおA区では掘削、基壇敷石の除去などの作業はすべて人力で行った。

B区の調査は、調査区内にも竹の根がはっていることが予想されたため(図3)、重機を搬入して地表下0.7~0.8mまでの近・現代盛土層を掘削・除去した。盛土を除去すると室町時代の遺構面に達し、室町時代後期の石敷遺構が調査区西半部で良好に遺存していることを確認した。その結果、延長部分を一部西へ拡張した。

両調査区ともに遺構の残存状況が良好であったため、京都府教育庁教育委員会文化財保護課の指導により、A区の江戸時代初期の礎石列、室町時代後期の石列、B区の室町時代後期の石敷を現地保存することになり、慈照寺整備委員会において承認され、設計変更などによって遺構の保全が図られることになった。このため、下層遺構については部分的な断割調査によって確認するにとどめたが、A区では室町時代よりさらに古い平安時代後期の遺構を検出した。また、B区で



図2 A区 基壇敷石取上げ作業(北東から)



図3 B区 調査前全景(南から)

は室町時代の整地層が厚さ1.5m以上続くことが明らかになった。遺構の現地保存に伴う、保護措置としてA区では全面に、B区では石敷を中心として土嚢による被覆を施した。調査中の排土はすべて境内に仮置きしたが、調査区の排土による完全な埋め戻しは行わず、土嚢による遺構の被覆にとどめた。すべての作業は6月10日に終了した。

## 2．調査地の位置と環境

### (1) 歴史的環境と立地

慈照寺は臨済宗相国寺派の寺院で、通称銀閣寺として知られる<sup>2)</sup>。前身は足利義政が晩年の隠棲所として如意ヶ岳北西麓の浄土寺寺域に構えた山荘東山殿で、これを義政の死後その遺命に従って寺院に改めたものである。

東山殿以前にあった浄土寺については、寛仁三年(1019)天台座主明教が浄土寺の座主となり<sup>3)</sup>、これを開祖とする説もあるが、『日本紀略』寛和二年(986)に「浄土寺」の名がみられること<sup>4)</sup>から、10世紀の段階には成立していたようである。その後、崩御した後一条天皇の火葬御骨が安置されたという記事や従三位藤原暁子が尼になった記事など、平安時代を通して浄土寺に関わる記事がある<sup>5)</sup>。また、鎌倉時代後期には三条氏や九条氏ら公家とも深い関わりがあったことが窺われる<sup>6)</sup>。しかし宝徳元年(1449)護摩堂より出火<sup>7)</sup>、御影堂本坊は無事だったものの境内建物を焼失し、その後義政の東山殿造営にあたって移転を余儀なくされた。

義政は文明十四年(1482)に東山浄土寺の地を選んで山荘の造営<sup>8)</sup>に着手、翌十五年六月には常御所が完成してここに移徙<sup>9)</sup>し、東求堂(持仏堂)、西指庵、超然亭、会所などを建立していった。そして長享三年(1489)観音殿(銀閣)が上棟される<sup>10)</sup>が、完成を待たずに延徳二年(1490)義政は死去、以後、義政の法号にちなんで「慈照寺」と称す禅寺となり相国寺の下におかれた。天文十九年(1550)十三代將軍義晴の葬儀が営まれた頃<sup>11)</sup>までは東山殿創建当初の建物が遺存していたが、その後永禄年間にかけて中尾・瓜生山城をめぐる攻防など戦国期の争乱に巻き込まれ、現存する東求堂・観音殿以外の建物は失われたとされる。これにより寺は荒廃し、天正十三年から慶長十七年(1586～1612)には前太政大臣近衛前久の別業として使用されていた<sup>12)</sup>ものの、再建には至らなかった。しかし慶長十九年(1614)に徳川家康の朱印状をもって寺領三五石を回復すると、元和から寛永期にかけて宮城丹波守豊盛とその孫豊嗣らによって寺の大規模な再建が行われ、方丈などの建物の建築をはじめ、東求堂・観音殿の修復、庭園の整備がなされた<sup>13)</sup>。その後も各所の修復が行われているが、この間に作成された絵図<sup>14)</sup>を見てもほぼ今日と同じ景観が保たれてきたことが窺われる。

現在、慈照寺境内は東山殿の遺構である東求堂、観音殿のほかの方丈(客殿)、庫裡、書院などの殿舎および総門、中門、唐門、錦鏡池を中心に展開する庭園からなる。寺域は如意ヶ岳の北西麓、二つの尾根に挟まれた谷筋の平坦部にあり、地勢はおおよそ北西から南東に向かって緩やか

に下降する。寺域の北と東は境内際まで山裾の傾斜面が迫り、南と西は急斜面あるいは断崖となつて段差を生じ、そこに構築された石垣が一部残存している（図版 5 -2、図 5 の現存石垣）。

## （ 2 ） 既往の調査

慈照寺境内ではこれまでに修復や解体・新築などに伴って数次の発掘調査や配管埋設に伴う立会調査が行われている（図 5 ）。

昭和 5 年（ 1930 ）には京都府史蹟勝地保存委員会による西指庵遺址の調査が行われた<sup>15)</sup>。西指庵は東山殿創建時の建物で、江戸時代の再建時にはすでに失われていたが、西田直二郎氏は現地を踏査し文献・絵図面と比較検討した結果、東求堂北東の丘陵地をその遺址と比定している。

昭和 39 年（ 1964 ）には東求堂の解体・修理に伴って発掘調査が実施され、庭石や礫敷きの溝などを検出、室町時代の遺物も多数出土した。また解体の結果、現在の東求堂の位置は建立時と異なる可能性が指摘された。<sup>16)</sup>

昭和 59 ～ 62 年（ 1984 ～ 87 ）には国庫補助事業による境内保存整備事業として、境内東斜面にある御茶の井庭園の調査が行われた<sup>17)</sup>。調査は地下水位調整のための排水施設敷設に伴うもので、現状石組みの実測・鑑定、ボーリング調査など地質学的な調査が主であったが、御茶の井東斜面の石組みは露出していた岩盤に多少手を加えて加工した痕跡が認められるとしている。

昭和 61 年（ 1986 ）には庫裡の建て替えに伴う発掘調査を行い、5 面の遺構面と最下層で縄文土器の出土する土石流跡を確認した。第 1 面では天保八年（ 1837 ）の棟札をもつ解体前の庫裡跡、第 2 面では元文三年（ 1738 ）の修理願書付図に描かれた庫裡跡、第 3 ・ 4 面では江戸時代前期に



図 4 1986年調査 全景（北東から） 調査区の奥に見えるのが中門の屋根

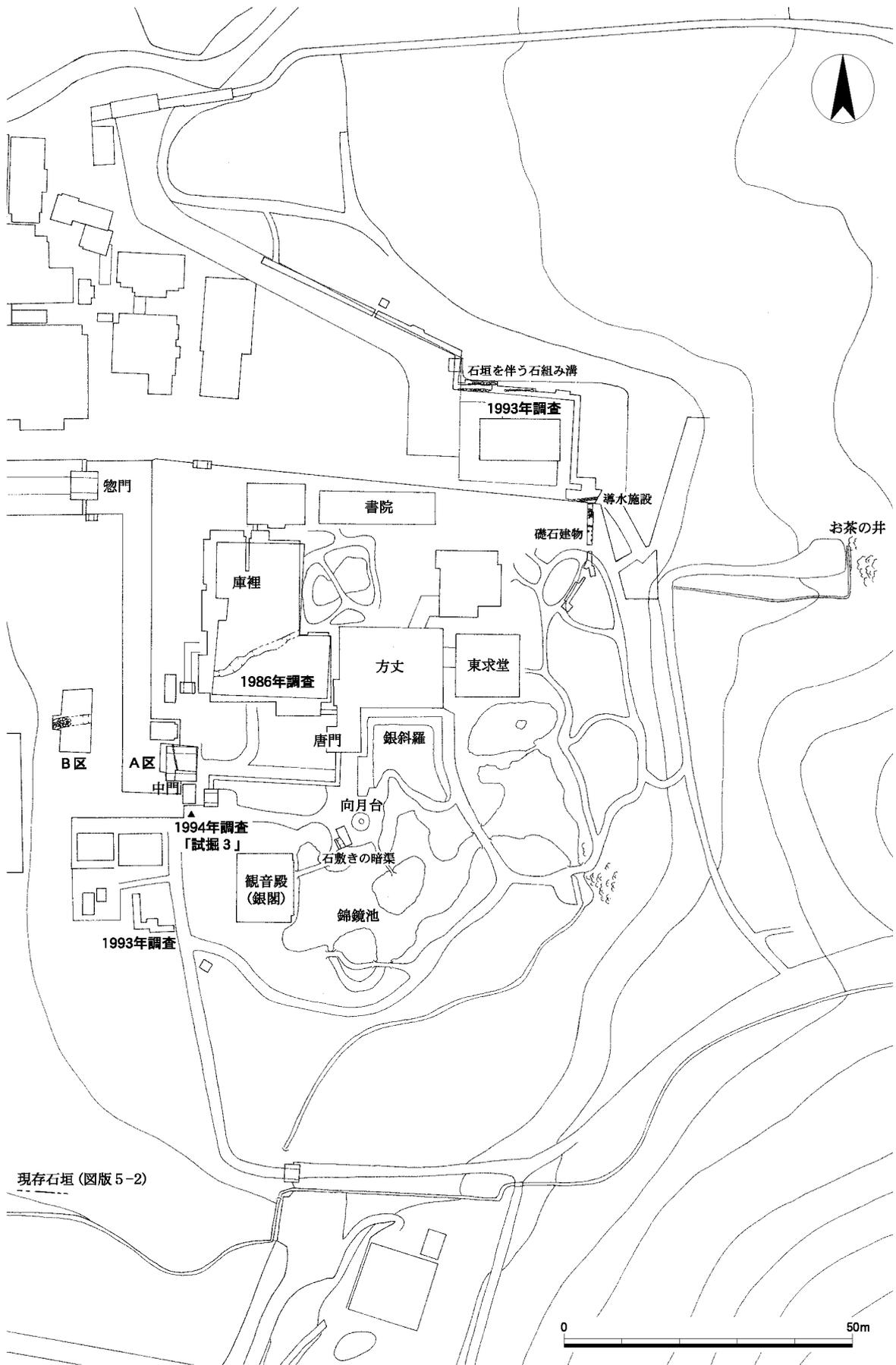


図5 既往調査区および本調査区位置図 (1 : 1,000)



図6 1993年調査 石垣を伴う石組み溝（西から）

相当する池状遺構、石組み井戸、溝、第5面では桃山時代の掘立柱建物、溝、土壇などと東山殿に相当する室町時代の溝1条を検出した（図4）。このうち室町時代の溝は、土石流の流れに沿って掘られた北西から南東方向のものである。

平成5年（1993）には防災工事に伴って発掘調査および立会調査を行った。<sup>19)</sup> 調査区は境内北東部の山裾に沿った北部地域と、観音殿周辺の南部地域

に分けて設置された。北部地域では近世の流路、石垣、溝、井戸のほか、室町時代の池、石垣を伴う石組み溝（図6）、拳大の石を詰めた暗渠、石製の導水施設（図7）、礎石建物および建物基壇、掘立柱、石敷遺構、石垣を基礎とする塀など東山殿に関連する多くの遺構を検出した。このうち石製の導水施設は2条の溝を刻んだ下石と蓋石を組み合わせ、漆をしみ込ませた布で目地を施したもので、清水を引き込み飲料水として利用していた可能性がある。また礎石建物は規模や性格は不明であるが、基壇や石垣遺構を伴うことから東山殿の主要な建物のひとつであったと考えられる。南部地域では観音殿北東の向月台脇の調査区で近世の景石根固め、室町時代の石敷きの暗渠（図8）を検出した。このほか南部地域では室町時代の整地層を現地地表下3.5m以上確認し、



図7 1993年調査 石製の導水施設（西から）



図8 1993年調査 石敷きの暗渠（南西から）

付近は室町時代に埋められた谷状地形を形成していることがわかった。このように本調査では調査区が狭く、遺構の拡がりや関係を知るためには困難な部分もあったが、発掘調査で初めて東山殿に関連する遺構を確認し、東山殿を復元する上で貴重な成果を多数得ることができた。

### 3 . 調査の概要

**A 区の調査** A 区は既存の石垣や排水溝、売店などに制約を受けながら、中門基壇全面および基壇の西側の参道部分（基壇端から西へ1.5m）、北側の脇門部分に調査区を設けた。調査の進行に伴って調査区外で遺構の有無を確認するため、東の参道部分に東拡張区、北の移転前の券売所部分に北拡張区を設けた。調査面積は42.7㎡であった。検出した江戸時代初期の遺構を保存するため、室町時代後期の遺構は調査区の西半のみ、平安時代後期の遺構は北西部の一部を断ち割って確認する形で調査を進めざるを得なかった。

基壇前面の参道部分と基壇東端側溝下部分に、南北方向に塩化ビニール管が埋設されて攪乱されている以外は比較的残存状況が良く、江戸時代後期以降、江戸時代初期、室町時代後期、平安時代後期の各遺構を検出した。

**B 区の調査** B 区はトイレの新築が予定されている部分に、およそ東西4.5m・南北10.6mの長方形の調査区を設定した。調査地点は竹藪であったため、近現代の盛土の除去には重機を用いた。調査区の中央西側で室町時代後期の石敷を検出したので、一部西側に調査区を拡張した。なお、調査区の中央には南北方向に多数の電線とマンホールが埋設されていた。調査面積は54.5㎡である。B 区でも室町時代後期の遺構を保存することになったため、下層の状況は調査区の壁際（東と南）を断ち割って確認するにとどめた。

#### (1) 層 序

A 区の層序（図9・10） 中門基壇上面と西前面の参道上面は全く段差がなく続いており、これが現地表面となっている。基壇は敷居石部分が最も高く、その東（後方）および西（前方）へ極く緩やかに傾斜している。地表面の標高は91.25m前後である。基壇部分では敷石の厚さが0.1～0.15m、基壇西の参道部分では地表下0.2m前後まで厚さ0.01m内外の堅く締まった砂・小礫層に

表1 遺構概要表

検出面	時代	遺構
A区第1・2面	江戸時代後期以降	中門基壇《礎石(P1～5)・敷石(敷居石・葛石・四半敷敷石)・敷石掘形(SD6)、整地層》、石敷(SX7)、参道整地
A区第3面	江戸時代初期	南北礎石列(P8～10)、東西礎石列(P11～13)、土壇(SK14)、整地層
A区第4面、 B区第1・2面	室町時代後期	石列(SX15)、土塁(SX16)、石敷(SX17)、溝(SD18)、柱穴(P19～21)、整地層
A区第5面	平安時代末期	石積(SX22)、溝(SD23)

よる路面整地が何層も積み重ねられている。以下、基壇構築時の江戸時代後期の整地層（図9の3・5・6層）が厚さ0.1～0.15mあり、下面が第3面（江戸時代初期）となる。江戸時代初期の整地層（図9の8～14層）が東では0.1m、西では0.2～0.25mの厚さで、第4面（室町時代後期）を被覆する。室町時代後期の整地層は最大で0.8mの厚さがあり（図10の8～15層）、第5面の石積を埋めている。

B区の層序（図16）調査地点は西への緩やかな傾斜地で、すぐ西は崖となっていて約3mほど低く、崖面には後世に石垣で擁壁がなされている。調査区の東端は標高91.5m、西端は91.2mで、地表面から約0.7～0.8mが近現代の盛土層となっていて、この直下が室町時代後期の遺構面となる。調査区中央には南北方向に近年の配線があったため、掘削は近現代盛土層内にとどまり遺構面には達しなかった。室町時代後期の遺構面は一旦平坦に均した後で、0.15m前後の暗褐色砂泥（図16の1層）で整地する（この上面が標高90.5m）。部分的に深く掘り下げて確認した結果、これ以下は少なくとも標高89m辺りまではいずれも砂層を主体とする人為的な盛土で、室町時代前期から中期の遺物を含んでいる。室町時代後期、東山殿造営時の大規模な整地に伴う盛土層と考えられる。

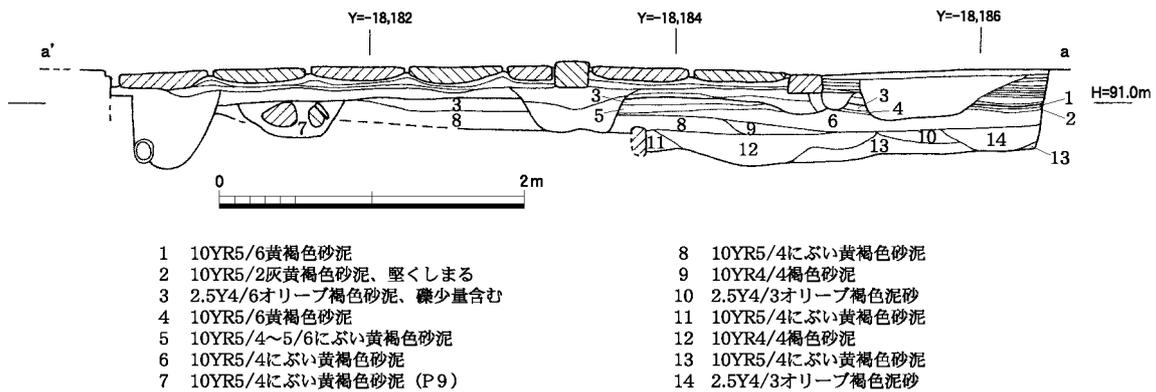


図9 A区 調査区中央セクション断面図（1：50）

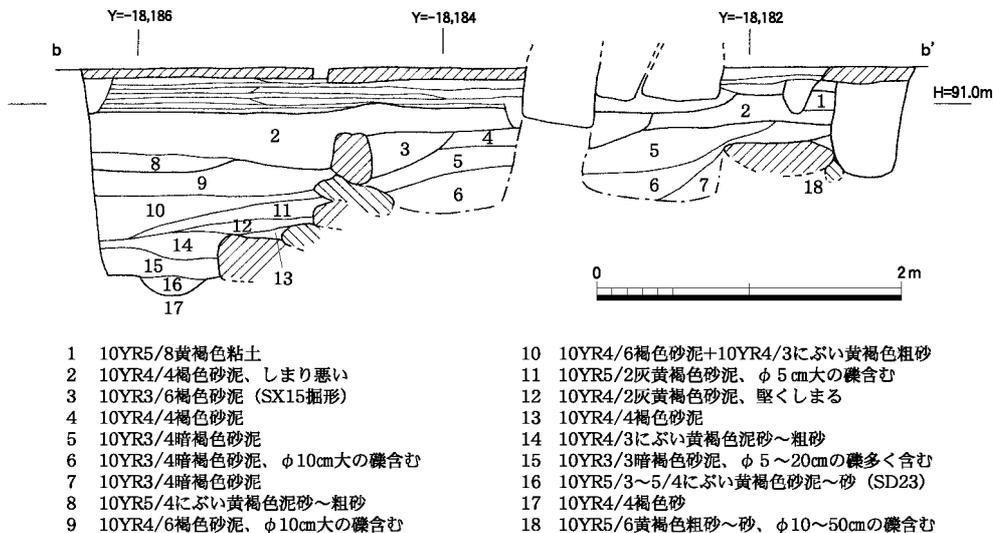


図10 A区 調査区北壁断面図（1：50）

( 2 ) 江戸時代後期以降《A区第1面・第2面》( 図版1・2、図11~13 )

解体された中門の基壇を第1面とし、この基壇が構築された江戸時代後期の段階を第2面とした。江戸時代後期に構築された中門は、補修などにより随時手が加えられつつ現在に至っている。

解体された中門は親柱の奥に控柱が設けられる「薬医門」で、西を正面としており、向かって左側に脇門が付属する( 図版1-2 )。第1面とした中門基壇( 図11 )の寸法は東西4.85m・南北4.26mあり、敷石中央( 親柱筋 ) から基壇前面( 西端 ) までが1.6m、また基壇東端までが3.75mとなる。親柱・控柱ともに礎石立ちで、親柱間( P1 - P2 ) つまり門の間口は4.0m、控柱( P3・4 ) は親柱から東へ2.4mに設けられる。親柱の礎石は、両石とも上面0.1m程を柱受け部として平坦な長軸0.8m・短軸0.6mの長方形に削り出し、門の内側となる一方の角に約0.2m四方、

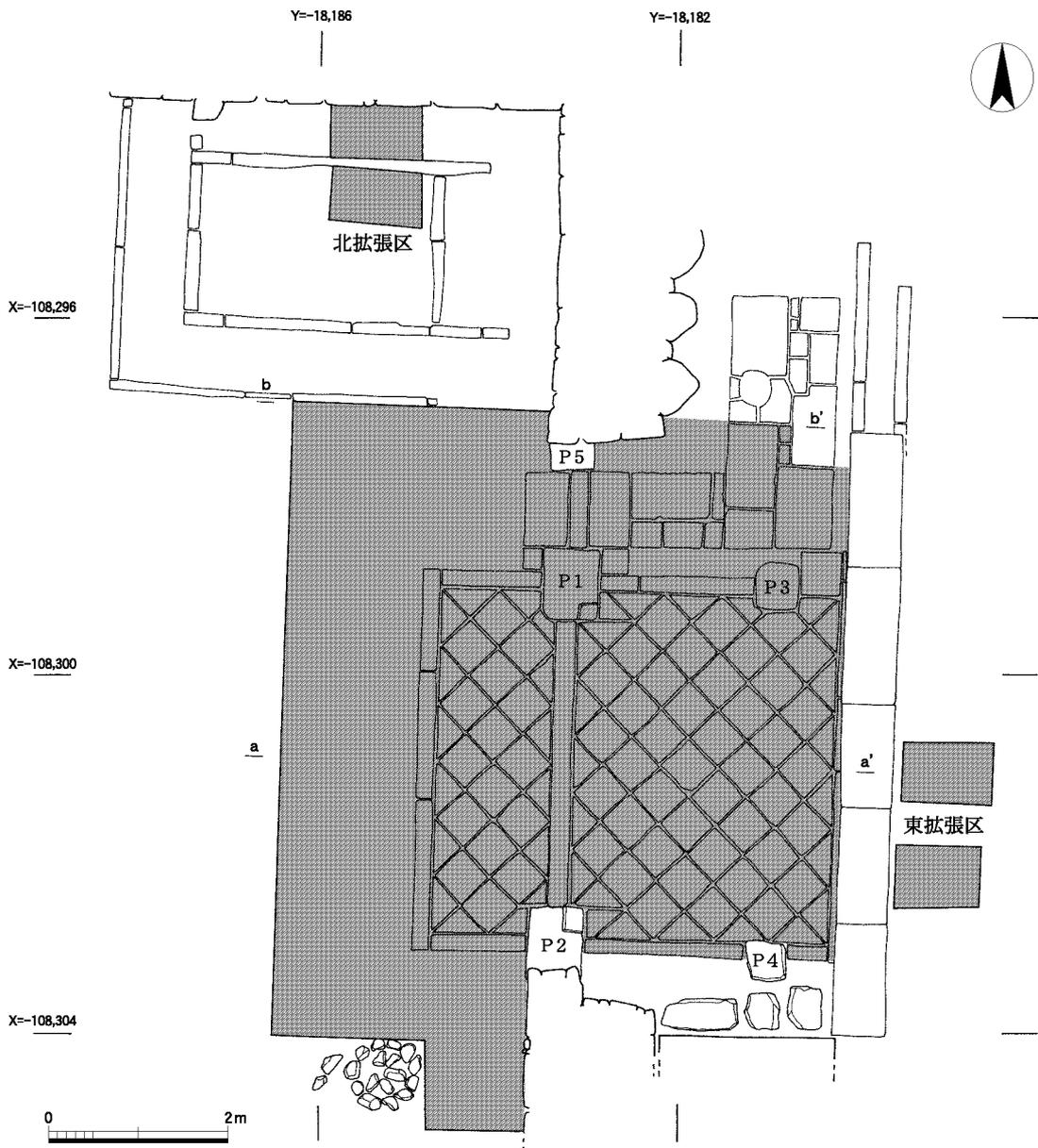


図11 A区 第1面中門基壇平面図および調査区配置図( 1 : 80 )



図12 A区 石敷SX7 (北西から)

深さ0.04mの扉受けを削り込む。石の厚さは0.5m程あり、下半は加工されていない。親柱礎石間には長さ3.18m・幅0.22mの一石からなる敷居石を据え、四周を幅0.18m内外の葛石で囲って、その内側を一边0.45m・厚さ0.1m内外の正方形の板石をいわゆる四半敷に敷き詰める。いずれも花崗岩が用いられており、上面のみが平滑に加工されている。また、この加工とは別にこれらの石の上面は多年にわたる参拝者の往来によって磨滅している。

基壇の構築手順は以下のようなものである。まず整地によって平坦な面を作り出した後(第2面整地層)、親柱および控柱の礎石を据え付ける。これら礎石は掘形を掘った後、割石などで根固めをして礎石を据えている。こののち、溝状の掘形(SD6)を掘って敷居石と葛石を据え、割石を差し入れるように敷いて上端の高さを調整し

ている。四半敷の敷石はこれらの内側を埋めるように下面に敷砂を入れて調整しながら敷き詰める。これらの作業のうち、少なくとも整地と礎石据付けまでは江戸時代後期(第2面)に行われたものと考え、それ以後基壇外装に関する作業は後世に部分的、あるいは全面的に改修されたものとみられる。

第2面(図13)では基壇西面(前面)の外側の南と北の対称の位置に雨落ちの滴痕を検出した(図中に小さく表現)。屋根南北側面からの水滴の痕跡

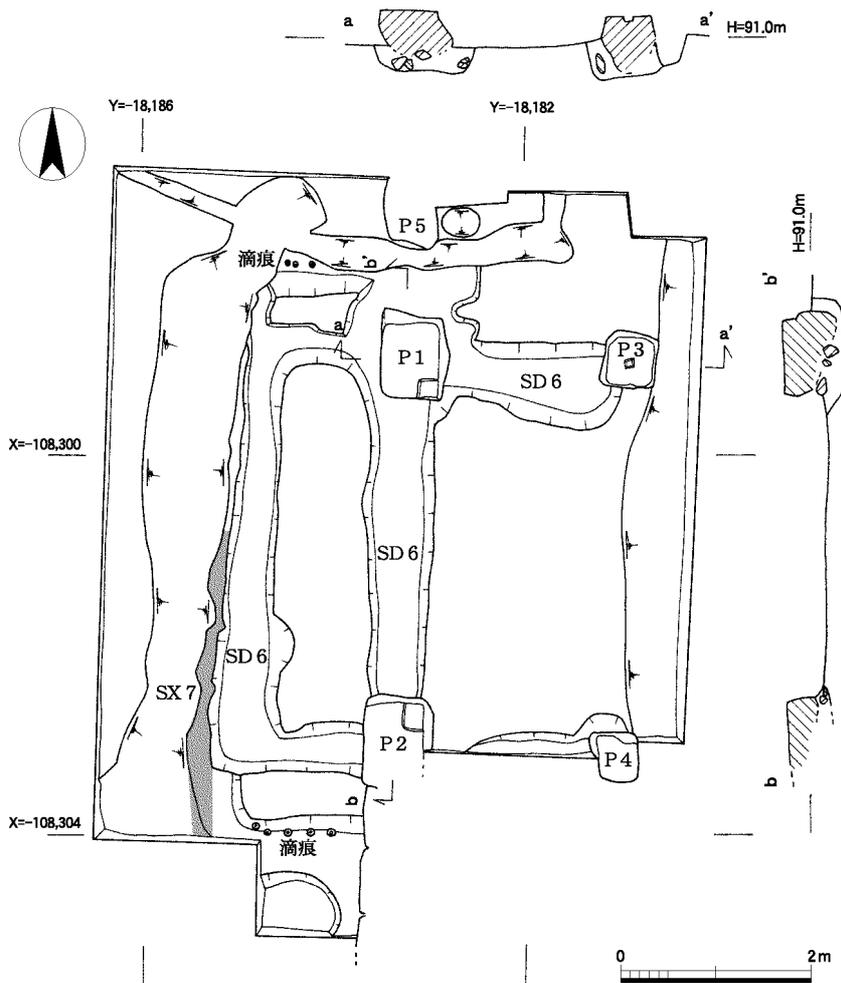


図13 A区 第2面遺構実測図(1:80)

と考えられる。また、基壇前面の南で検出した南北方向の石敷SX 7（図12）は下面に長径0.2m前後の扁平な石を平坦に並べ、その上に細かい礫と瓦片を敷き詰めている。下面の石は掘形を持たず、整地面上に並べられ、整地層に沈み込んだ状態で検出した。幅0.4m以上で南北3.5m程度検出した。石垣や基壇葛石などのような重量物を支える基底部と考えられるが、部分的な検出にとどまったため、全容は不明である。中門の親柱P 1と控柱P 3については礎石を取り上げた。P 1は東西1.1m・南北1.4mの方形掘形、P 3は東半が攪乱されているが、径1.2m前後の円形掘形であった。

### （3）江戸時代初期《A区第3面》（図版3-1、図14）

先の中門に先行する門の遺構と考えられる南北礎石列、これに直交する東西礎石列、ほかに土壇があり、これらは第3面で成立している。

南北礎石列 P 8・9・10からなる。いずれも長径0.1～0.2mの礫を入れ、掘形の規模はP 8とP 9が径0.6mで、P10が径0.7mとやや大きい。礎石は既に失われており、礎石下部の根固めのみを検出した。柱間はP 8 - P 9間が2.8m、P 9 - P10間が1.2mである。P 8 - P 9間が門の間口となると考えられる。P 8とP 9は門の親柱となり、その西に控柱の痕跡が認められず、また東拡張区を設けて確認したところ東にも控柱の痕跡がなかったことから、棟門形式の門であったと考えられる。先の薬医門よりも南側の親柱を基準として東に1.8m、北に2.0mずれた位置である。

東西礎石列 P 11・12・13からなる。南北礎石列に直交してP10に取り付く。これらも同様に礎石下部の根固めのみを検出であった。掘形の規模はP11が径0.45m、P12が0.35m、P13が0.5mと、やや南北礎石列のものよりも小振りで

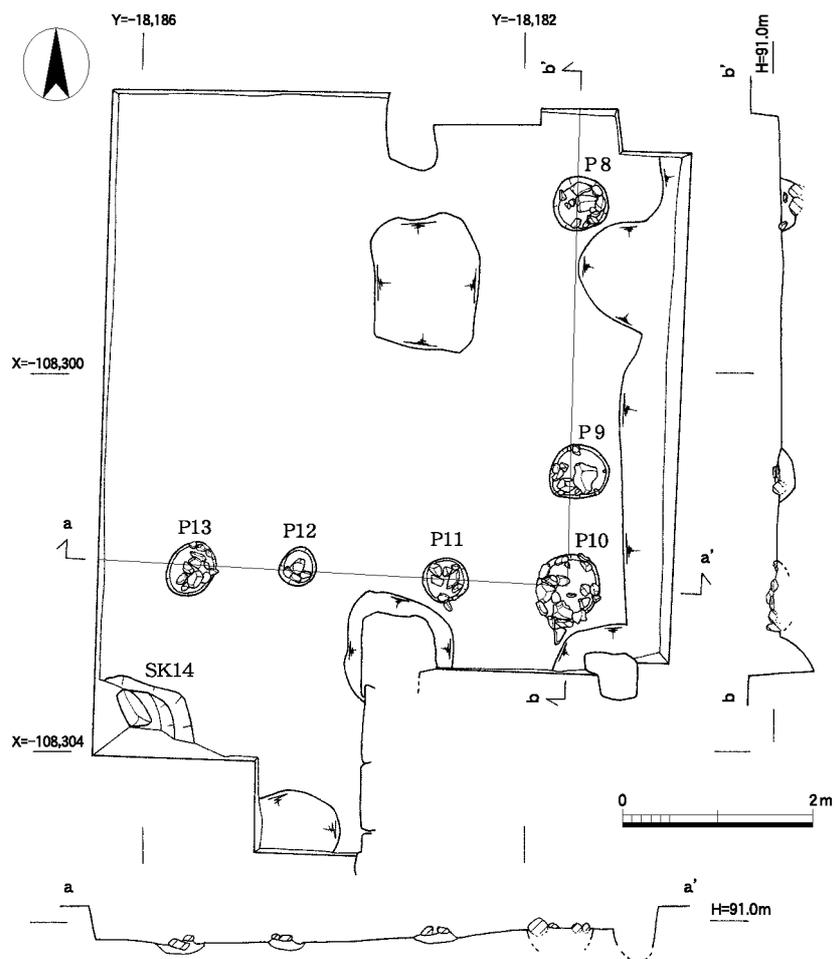


図14 A区 第3面遺構実測図（1：80）

ある。柱間はP10 - P11間・P12 - P13間が1.2m、P11 - P12間が1.5mである。惣門から中門へ続く参道の南を画する築垣のような施設であったと考えられ、この柱筋の東延長上に現在の東西方向築地が存在している。

土壌SK14 調査区の南西隅で検出した。東西0.8m・南北0.5m以上、深さは0.7m前後あり、底部で長軸が0.4m以上の花崗岩が出土した。調査区外に延びており、遺構の全容は不明である。後世の瓦溜め状の遺構がほぼ重なっており、花崗岩の上面まで攪乱されている。

#### (4) 室町時代後期《A区第4面、B区第1・2面》(図版3-2・4、図15・16)

A区では南北方向の石列(SX15)これに並行する土塁状高まり(SX16)を検出した。江戸時代初期の南北礎石列を保存する方針で調査を進めたので、当該期のSX15の西側のみの調査となった。B区では調査区の中央西半で路状の遺構・石敷(SX17)、その東延長部で東西方向の溝

(SD18)、このほか柱穴(P19~21)などを検出した。

石列SX15 A区の中央西寄りを南北に縦断する石列である。主軸方向は北で西へ15度程度振っている。石の上端の高さ(標高90.8m)をほぼ揃え、縦長の石の小口を主軸方向に向け、長辺の扁平な部分を面として並べる。石の東側には掘形を持ち裏込めがなされており、西面は一石分・20~30cmの段差を設けている。途中二石は抜き取られていたため、検出したのは都合十二石・5.4m分であった。南端は江戸時代後期の中門親柱P2に壊されており、北端は調査区外に延びるため、全容は不明である。建物基壇の外装、あるいは境内苑路の縁石のようなものかと思われる。

土塁SX16 A区の西壁で検出した土塁状の遺構である。SX15の西へ約2.4mの距離にほぼ並行して東端があり、西側へ高まる。上端は標高90.8mで、厚さ0.1m前後の固く締まった水平な砂層が5層程度版築状に積み重なっている。部分的な検出にとどまったので断定できな

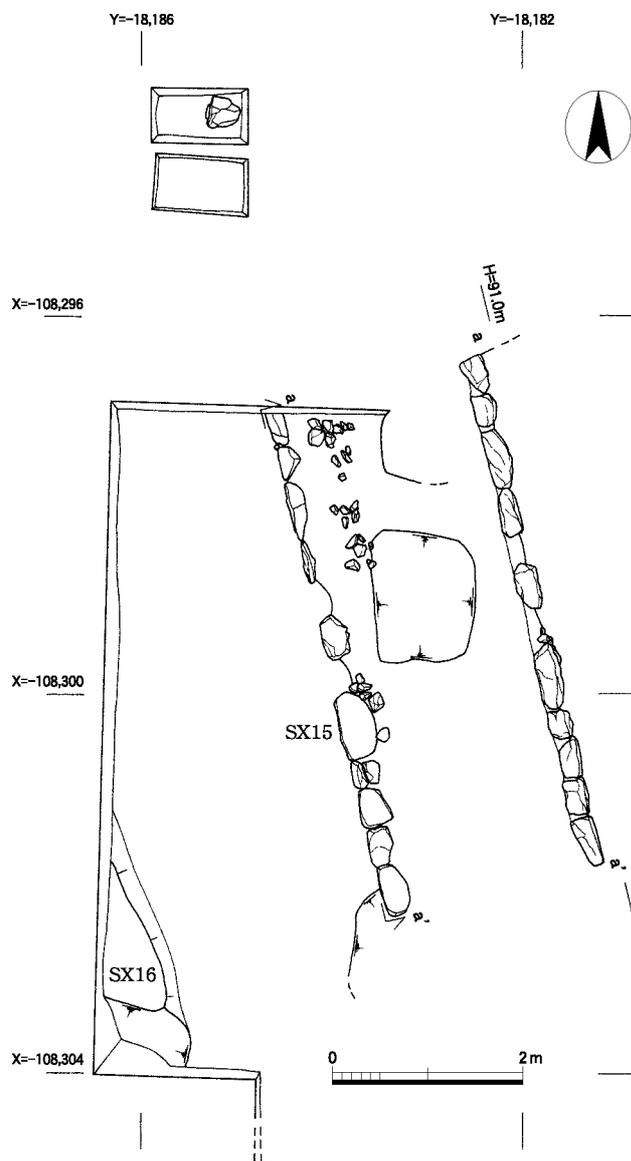
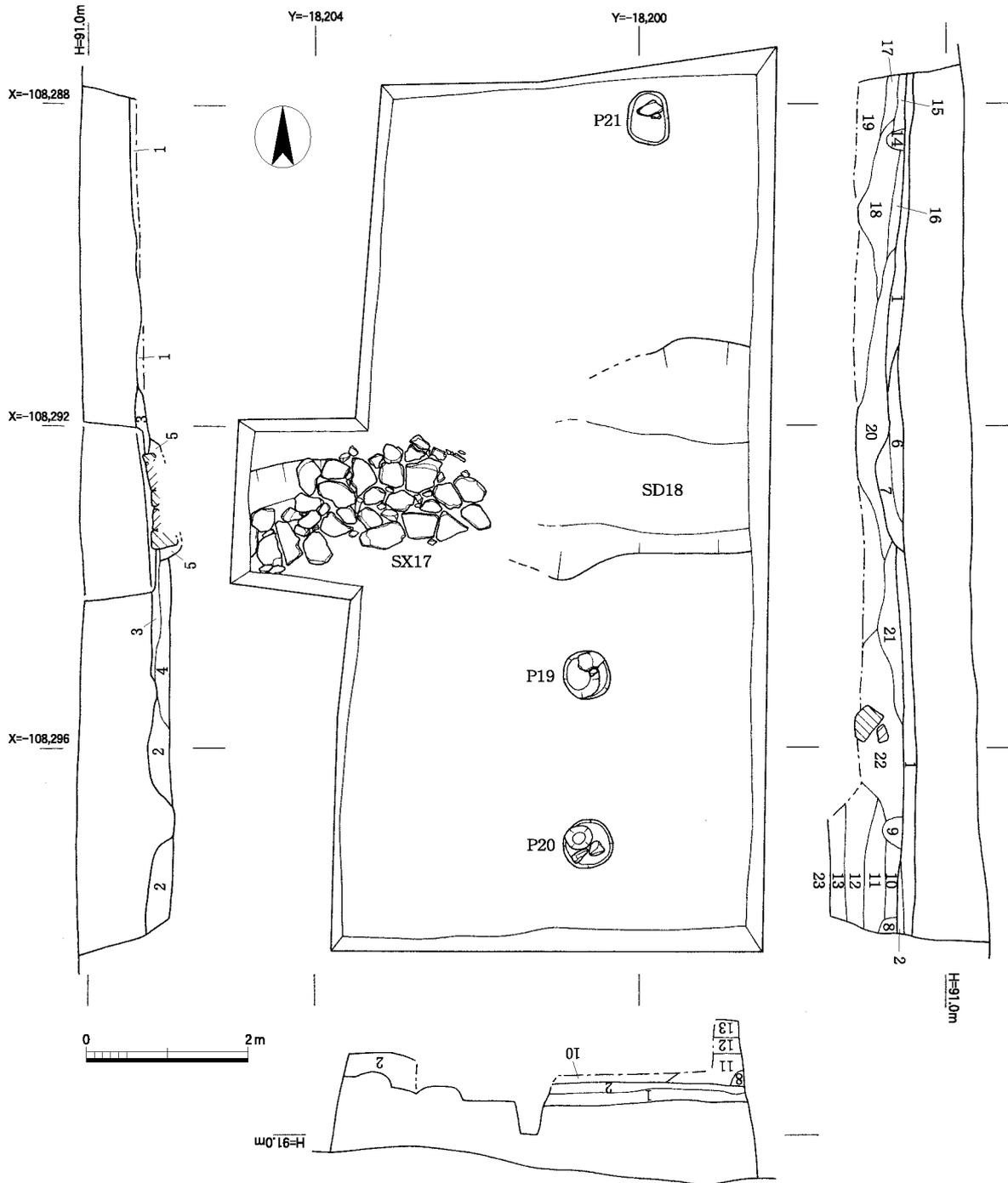


図15 A区 第4面西半部遺構実測図(1:80)



- |    |                                 |    |                                 |
|----|---------------------------------|----|---------------------------------|
| 1  | 10YR3/3暗褐色砂泥                    | 13 | 2.5Y5/4黄褐色砂、φ 5~20cmの礫含む        |
| 2  | 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂                 | 14 | 10YR3/3暗褐色砂泥                    |
| 3  | 10YR3/4暗褐色砂泥                    | 15 | 2.5Y4/4オリーブ褐色泥砂                 |
| 4  | 10YR3/3暗褐色砂泥                    | 16 | 2.5Y3/2黒褐色砂泥                    |
| 5  | 10YR4/4褐色砂泥                     | 17 | 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂                 |
| 6  | 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 (石敷き抜き取り溝)      | 18 | 2.5Y5/4黄褐色泥砂                    |
| 7  | 10YR3/3暗褐色砂泥、炭含む (石敷き抜き取り溝)     | 19 | 2.5Y5/3~5/4黄褐色砂                 |
| 8  | 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥                 | 20 | 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂                 |
| 9  | 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥                | 21 | 2.5Y4/3~4/4オリーブ褐色砂泥、炭含む         |
| 10 | 2.5Y5/3~5/4暗褐色泥砂、堅くしまる          | 22 | 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂、φ 20~30cmの礫多く含む |
| 11 | 2.5Y4/4オリーブ褐色泥砂、φ 5~20cmの礫・炭含む  | 23 | 2.5Y6/2灰黄色砂~砂泥、φ 20~30cmの礫・炭含む  |
| 12 | 2.5Y5/3~5/4黄褐色泥砂~砂、φ 5~20cmの礫含む |    |                                 |

図16 B区 遺構実測図 (1:80)

いが、建物の基壇や築地の基底部の可能性が考えられる。

石敷SX17 B区中央西寄りで見出した。長径0.3～0.5m程度の石の平坦面を上につなげて敷いた、東西方向の路面状の遺構である（標高90.3m前後）。上面は東から西に向かって低く傾斜し、さらに北から南へも緩やかに傾斜している。幅は1.3m、検出長は約3mあり、調査区中央より東は石が抜かれて壊されている。西は調査区外へ続いているようである。南北方向に石の両側を断ち割って確認したところ、予想に反して使用されている石は扁平なものではなく、厚みが0.3mもあるような立体的な石を用いており、全体として溝状の掘形を掘って据えられていた。この方位は東で北に振っており、ほぼSX15に直交するような方位と見られる。

溝SD18 B区中央、SX17の東で見出した。幅2.5m程の浅い東西方向の溝である。溝の底部は平滑ではなく、凸凹としていた。SX17の東延長上にあり、その形状から敷石が抜き取られた痕跡が掘形とともに溝状に検出されたものである。

柱穴 B区では東半部で、P19・20・21など柱穴を検出している。いずれも径0.5m前後の掘形で、埋土には礫が入っている。建物として把握することはできなかった。

#### (5) 平安時代後期《A区第5面》(図版5-1、図17)

当期の遺構は、A区北西隅で下層遺構有無確認のために行ったSX15西面の断割調査で見出した。

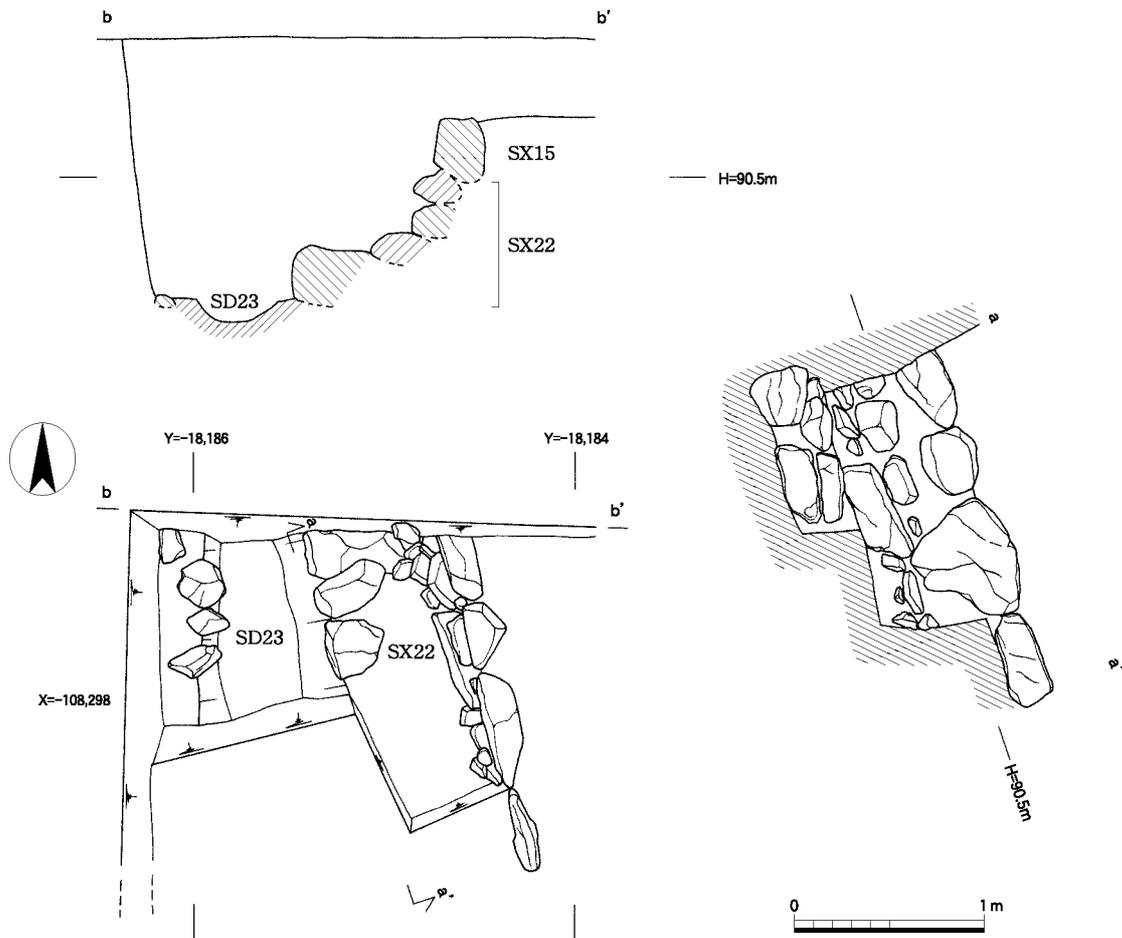


図17 A区 第5面遺構実測図(1:40)

一連の遺構と考えられる西面する南北方向の石積と並走する溝がある。

石積SX22 SX15石列の真下で検出した。SX15の石列の下面で他の箇所でも石が確認できているので、ほぼ重なる位置に同じ方位で構築されていると考えられる。SX15(上段の一石分)とは用いられている石の種類や積み方が違うこと、両者間に石が抜け土が挟まっている箇所がみられること、および出土遺物から、時期が異なると判断した。SX22は小口を西向きに揃えた基底となる一石の上に、約60cm東に控えて小口積みにより西向きの面としたもので、上部がSX15構築時に壊されているが、2・3石分(高さ40cm前後)が残る。

溝SD23 SX22の基底石の西面を溝の東岸とする南北方向の溝である。幅は0.6~0.8m、深さは基底石の下面から0.1~0.2mある。溝の西岸にも小振りな石を検出しており、護岸の痕跡と考えられる。

このSX22とSD23は一連の遺構で、石垣状の遺構の前面に溝が設けられたものと考えられるが、検出範囲が狭いので全容は判らない。建物の基壇の外装部分、あるいは築地状のもの基底部と考えている。

## 4 . 出土遺物の概要

遺物はA区、B区あわせて整理箱に23箱出土した。器種は土器類、瓦類、金属製品、石製品、土製品などがあり、このうち大半が土器類で続いて瓦類が多い。時期的には縄文時代および平安時代中期から江戸時代に属する(表2)。B区の近現代盛り土、第1面整地層および断割調査で出土した遺物は小片が多く図化するにいたらず、量的にも少なかったので、ここではA区の遺物についてのみ取り上げる。なお土器類の年代観は平安京・京都 ~ 戢期編年に準じた。<sup>20)</sup>

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	縄文土器	0箱		0箱	0箱
平安時代	軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入磁器・瓦器・鉄釘・銭貨	1箱	軒丸瓦2点、軒平瓦2点、土師器3点、輸入白磁9点、瓦器1点	1箱	0箱
鎌倉時代	軒丸瓦・軒平瓦	0箱	軒丸瓦4点、軒平瓦2点	0箱	0箱
室町時代	軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・輸入磁器・鑄型・鉄釘	6箱	土師器21点、鑄型1点	6箱	0箱
江戸時代	軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・土師器・国産施釉陶器・焼締陶器・瓦器・鉄釘・銭貨・砥石	15箱	軒丸瓦1点、軒平瓦2点、土師器6点、施釉陶器1点	12箱	3箱
計		23箱	55点(1箱)	19箱	3箱

(1) 土器類 (図版6、図18)

土器類には土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、焼締陶器、国産陶磁器 (施釉陶器・染付)、輸入磁器 (青磁・白磁)、縄文土器があり、土師器がその大半を占める。平安時代の須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、輸入白磁の多くは小片で、各時期の遺構や整地層から出土した混入遺物である。遺構は確認できなかったが、平安時代中期 (期) に属する土師器も比較的多く出土している。縄文土器は外面にわずかに羽状縄文が認められる破片である。以下、図化できた土器類のうち遺構・整地層に伴って出土したものについて概要を述べる。

SX22・SD23 (図版6-2、図18 1~4) 両遺構のほか同時期の第5面整地層からは、土師器 (皿・甕)、須恵器 (杯・壺)、灰釉陶器 (皿)、瓦器 (椀)、輸入白磁 (椀・壺) の土器類と瓦、鉄釘が少量出土した。土師皿には口縁部が内弯して端部が立ち上がる小皿 (1・2) と大皿 (3) がある。瓦器椀 (4) は底部を欠くが、口縁端部内側に沈線がめぐり、内面および外面口縁付近に密にミガキを施す。輸入白磁 (図版7-1) には玉縁口縁椀や肩部に放射状に文様を施した壺<sup>21)</sup>がある。平安時代後期 (V期古段階) に属する。

第4面整地層 (図版6-1、図18 5~25) 土師皿がまとまって出土し、土器類総破片数に対して97%が土師器であった。しかし細かい破片が多く完形に復元できたものはほとんどなかった。

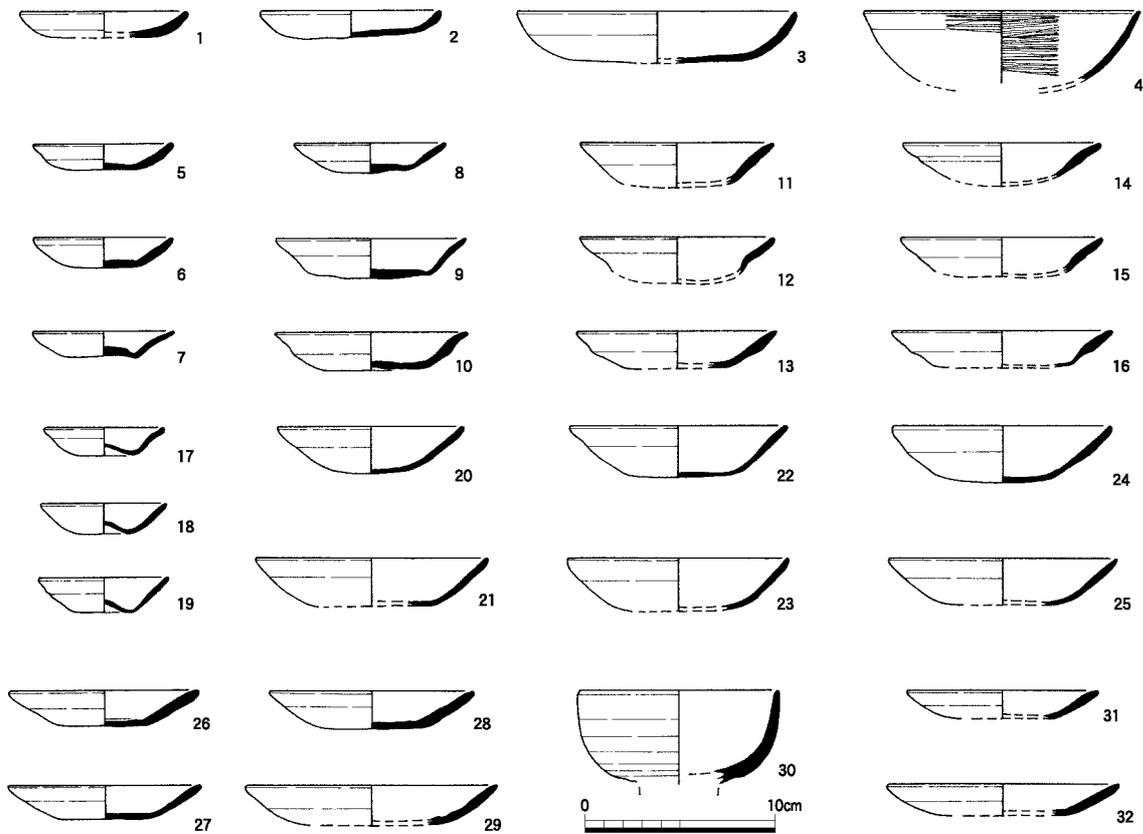


図18 A区 出土土器実測図 (1:4)  
(1~4: SX22・SD23、5~25: 第4面整地層、26~30: 第3面整地層、31・32: P12)

土師器のほかには輸入青磁、瓦器、須恵器の小片がわずかに出土し、土器類以外でも瓦小片と鉄釘が数点出土しているにすぎない。土師皿には赤色系小皿（5～8）、大皿（9～16）、白色系小皿（17～19）、大皿（20～25）があり、8：2の割合で赤色系が多い。室町時代前期（期古～中段階）に属する。

第3面整地層（図版6-3、図18 26～30）土師器、焼締陶器、国産施釉陶器、瓦器の土器類のほか瓦と鉄釘が出土した。焼締陶器には信楽焼鉢、備前焼壺、瓦器には火鉢や羽釜の破片があり時期的には室町時代のものが混入している。土師皿には中皿（26・27）と大皿（28・29）があり、いずれも口縁は直線的に外方へ拡がり、端部は丸くおさめる。底部内面の圈線がやや顕著である。瀬戸・美濃産の施釉陶器碗（30）は灰白色の釉がやや厚く施され全面に貫入がみられる。江戸時代初期（期古段階）に属する。

P12（図版6-3、図18 31・32）土師器、瓦器、瓦、銭貨が出土した。土師器以外は混入遺

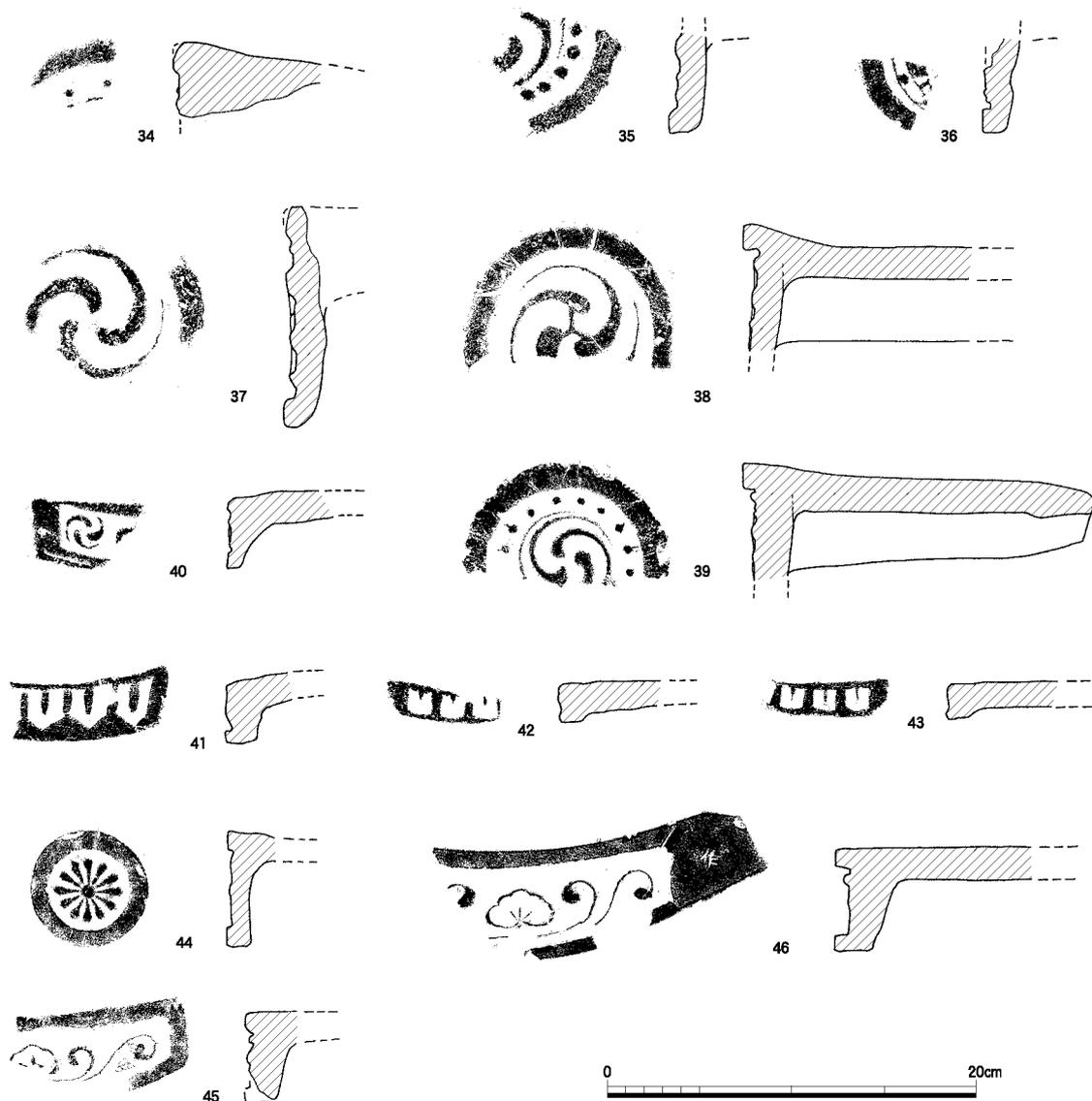


図19 A区 出土軒瓦拓影・実測図（1：4）

物で、北宋銭「祥符元寶」が1点ある。土師皿は中皿（31）と大皿（32）があり、いずれも口縁は直線的に外方へ広がり、端部は丸くおさめる。江戸時代初期（ 期古段階）に属する。

## （2）瓦類（図版7-3・8、図19）

瓦類の大半は江戸時代後期以降のもので、大部分はSK14上層から出土した。平安時代から室町時代の瓦は各時期の遺構・整地層から出土しているが、磨滅した小片が多い。

軒丸瓦（図版7-3・8、図19 34～39・44） 34は瓦当周辺部の文様がわずかに確認できる小片で全体に磨滅するが、平安時代中期の蓮華文軒丸瓦と考えられる。35は三巴文軒丸瓦で、左巻きの巴文の周辺に珠文を配する。平安時代後期のもので瓦当部推定径12.0cmとやや小型である。第3面整地層出土。36は瓦当部のみ的小片だが蓮華文軒丸瓦と考える。瓦当部推定径10.0cmと小型である。第3面整地層出土。37～39は三巴文軒丸瓦である。37は右巻きの巴文で尾部は互いに接しない。瓦当部裏面のナデ調整による指跡が明瞭に残る。第3面整地層出土。38は右巻きの巴文で頭部は中心で連結する。瓦当部推定径10.0cmと小型、大覚寺出土DKM13-Aと同範<sup>22)</sup>である。西壁断割出土。39は左巻きの巴文で周辺に珠文を配する。瓦当部径10.3cm、丸瓦部は端部まで残存し長さ19cmと小型である。丸瓦凸面は縦方向に丁寧にナデて調整する。第4面整地層出土。36～39はいずれも鎌倉時代のもので、小型であるため築地などの建物に用いたと推定できる。44は菊文小型軒丸瓦でSK14上層から出土した。

軒平瓦（図版8、図19 40～43・45・46） 40は連巴文軒平瓦で左端部の破片である。右巻きの三巴文が連続して配される。平安時代後期。第4面整地層出土。41は剣頭文軒平瓦である。平瓦部凹面だけでなく、瓦当面にも一部布目が残る。平安時代後期。第4面出土。42・43は小型の剣頭文軒平瓦である。個々の剣頭文の下端部は尖らない。鎌倉時代。いずれも第3面整地層出土。45・46は唐草文軒平瓦でいずれもSK14上層から出土した。45は範の右下に鱗文、46は周縁部に「作」が刻印される。このほかにもSK14上層からは多くの軒瓦が出土しているが、これらは現在も慈照寺境内の建物で使用されている瓦と同じである。

## （3）その他（図版7-2、図20）

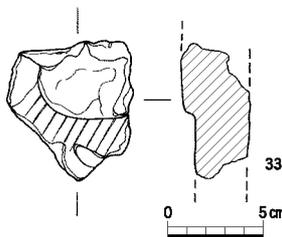


図20 鑄型実測図（1：4）

33は約6cm四方、厚さ3.5cmの土製品で胎土にスサが多く含まれ、表面が赤変することから鑄型の可能性が考えられる。上面には別粘土を貼り付け、細い斜線が刻まれる。第3面出土。

このほか金属製品では鉄釘が各遺構・整地層から比較的多く出土している。いずれも錆の付着が著しい。銭貨は祥符元寶、永楽通寶、寛永通寶がそれぞれ1枚ずつ出土した。石製品には砥石がある。

## 5.まとめ

今回の調査内容を概観して、まとめにかえたいと思う。

A区北西部の断割調査で平安時代後期の石積・溝を検出した。この遺構は石垣あるいは建物の基壇の一部と考えているが、山荘・東山殿が営まれる以前の時期にあたり、実態があまり判っていない浄土寺の遺構であろう。少なくとも11世紀代には浄土寺が営まれていたことが窺える。

室町時代後期は、義政による山荘・東山殿の造営の時期にあたる。A区石列や土塁状遺構、B区の石敷は、東山殿創建期の遺構と考えられる。また、B区では1.5m以上の厚い整地層を確認した。これは1993年調査とも符合しており、東山殿造営時に、地形的に低い寺域の西側では、平坦面を確保するためかなり大規模な造成がなされたことを示している。

この平安時代後期・室町時代後期の遺構の主軸の方位は、いずれも北で西に振れる方向で、現在の境内の各建物や施設とは大きく異なっている。1986年調査の溝、1993年調査の暗渠・石製導水施設(図5)など多くの室町時代の遺構も同様の方位を示しており、東山殿の造営はこの北で西に振れる方位を造営の主軸方位として採用していたものと考えられる。なお、平成6年(1994)には前年と一連の調査として、境内の防災・防犯工事に伴う立会調査<sup>23)</sup>が行われ、六箇所設けた試掘トレンチのうち、中門と銀閣の間の参道部分に設定した「試掘3」で、地表下約0.3m(標高91.0m)で南北方向の石列二石分を検出している。本調査の石列SX15の南延長上約10m地点にあたり、石の組み方が類似することから、同一の遺構と考えられる。

江戸時代初期の遺構は、A区の中門に先行する門の遺構(南北礎石列)とこれに直交する東西礎石列がある。この時期は荒廃していた慈照寺の大々的な再建が宮城丹波守豊盛によって行われた時期とほぼ重なることから、その事業の一環として建てられた中門の遺構とみる。検出した礎石列より棟門であったと考えられる。これら江戸時代以降の遺構の主軸は現在と同じほぼ正方位を示すことから、この大規模な再興事業の時に、西に振れる古い割付から正方位への転換が行われたと考えられる。

今回解体された中門は親柱の礎石が江戸時代後期に据えられたものであり、葛石や敷石などの基壇外装はその後、部分的な補修や全面的な改修が行われて調査前の基壇の状況に至ったものであることを確認した。

さて、慈照寺の境内の建物に関する絵図は、江戸時代中期から末期に描かれた4枚が知られている<sup>24)</sup>。その中で最も古いものが『元文三年四月慈照寺修理願付図』(図22)といわれるもので、元文三年(1738)に奉行所に提出された修理願書に付された絵図である。この絵図では惣門が控柱のある薬医門として描かれているのに対して、中門は控柱のない棟門として描かれている。またこの図の中門は南側の東西方向の



図21 1994年調査「試掘3」  
検出石列(西から)

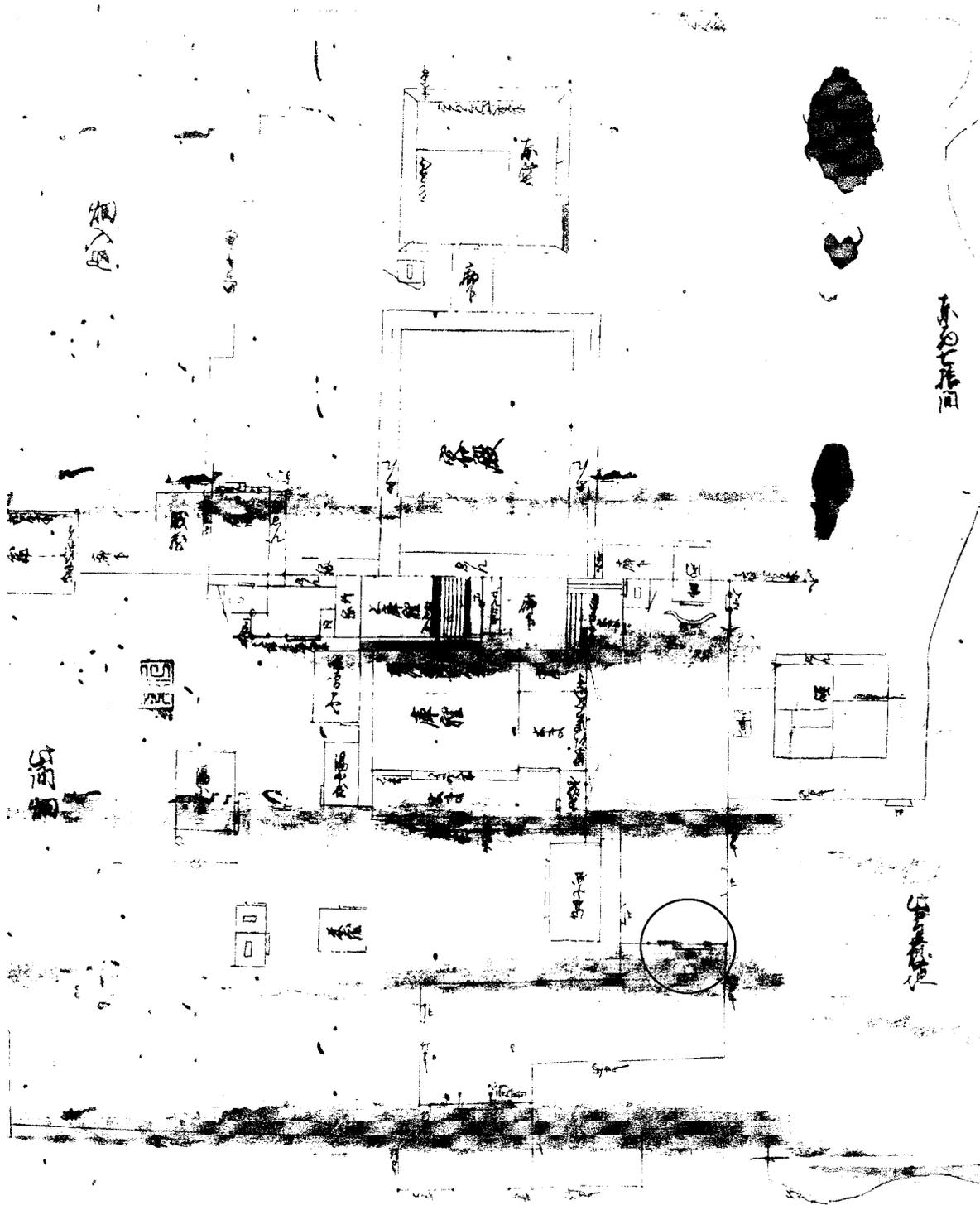


図22 「元文三年四月慈照寺修理願付図」 文部科学省国文学研究資料館蔵  
 (『日本建築史基礎資料集成 十六 書院』 中央公論美術出版より転載)

「込力キ」に直交し、柱一間分あけて間口が西向きに開けられており、北側には脇門が描き込まれている。この状況は本調査の第3面として検出した南北礎石列と東西礎石列のあり方とよく一致している。つまり、東西礎石列は絵図に描かれた「込力キ」にあたり、これに直交する南北礎石列は門の親柱列となる。今回の調査では、親柱の北側のものまでを検出したことになるが、この北に脇門があったことが推測される。この次の『宝暦五亥年五月絵図』(1755年)では中門が惣

門と同じ控柱のある薬医門の形式で表現されているので、元文三年から宝暦五年までの間に中門が薬医門に改修されたとみてよいであろう。この棟門から薬医門への変遷も、今回の調査成果と符合している。

本調査では上記のように、解体中門の構築時期、先行する江戸時代初期の門遺構を検出し、その下層に慈照寺の前身である東山殿、さらに先行する浄土寺に関する遺構が良好に遺存していることを明らかにした。調査面積は少なかったものの、予想以上の成果が得られ、史跡であることから両区とも遺構を現地で保存することとなった。しかし、小面積の調査であるがゆえに、これらの遺構が東山殿や浄土寺境内の中でどのような位置にあるか、どのような構築物の一部であるのかまで言及することはできなかった。これらについては、今後の課題として周辺の調査に委ねたい。

#### 註

- 1) 慈照寺境内は、庭園が大正14年(1925)10月特別史跡・特別名勝、旧境内は昭和6年(1931)2月に史跡に指定されている。また、平成6年(1994)には世界遺産にも登録された。
- 2) 周辺の歴史的環境や位置については、川上 貢「東山殿」『日本中世住宅の研究』(墨水書房、1967年) および川上 貢「北山殿と東山殿」『金閣と銀閣』(淡交新社、1964年)のほか、京都市編『史料 京都の歴史 第8巻 左京区』(平凡社、1985年)『京都市の地名』(平凡社、1979年)『国史大辞典』(吉川弘文館 1986年)『日本史大事典』(平凡社、1993年)『慈照寺(銀閣寺)』(慈照寺、1994年)などを参照した。
- 3) 『天台座主記』寛仁三年「第廿五僧正明教浄土寺治山一年」。
- 4) 『日本紀略』寛和二年三月十四日条「従三位藤原暁子於浄土寺為尼。右衛門督源忠清母。故枇杷左大臣長女也」。
- 5) 『日本紀略』長元九年五月十九日条「奉火葬浄土寺西原。浄土寺遺勅。停素服挙哀。不任喪司。不置国忌山陵。従今日立伽藍於神楽岡東。名曰菩提樹院。御葬之間。長家以下拾御骨。経輔懸御骨。安置浄土寺畢」。『兵範記』久安五年十一月廿二日条「蔵人右少弁浄土寺、為先人浄土寺辺造立一堂、...」。『山槐記』安元元年八月十一日条「天晴、建春門院密々御幸相模守業房浄土寺堂、院明・可有還御、女院今夜還御云々」。『百鍊抄』寿永元年十二月四日条「院女房丹後局浄土寺供養」など。
- 6) 三条公房は浄土寺相国と呼ばれていたといわれ、九条忠教・師教父子は『徒然草』百七段に「浄土寺前関白」とみられる。
- 7) 『康富記』宝徳元年六月廿二日条「今夜及暁東山浄土寺殿焼亡、自護摩堂出火、出慈恵大師御影、々々堂免炎云々、御本坊又無為云々」。
- 8) 『後法興院記』文明十四年二月八日条「去四日武家浄土寺山々莊事始云々、此儀普請人夫事家門領内可 知之由有武命」。ほか、『大乘院寺社雑事記』など。
- 9) 『御湯殿上日記』文明十五年六月二十七日条「むろまち殿ひむかし山へ御わたましのよきこゆる。めてたし」。ほか、『御湯殿上日記』、『親長卿記』同日条。
- 10) 『蔭軒日録』長享三年二月廿三日条「齋罷謁東府。今日観音殿上棟。諸識者出仕。...」
- 11) 『万松院殿穴太記』天文十九年五月「廿一日には御葬りの事有べしとて、開闢松田対馬守盛秀奉行

して、諸郷・諸村の人足を催して東山の麓慈照寺の内に葬場の普請を致す。代々の御葬礼は北山等持院にて有しに、今は乱れたる世の中といひ、又この日来入場の御事のみ御心に被掛し御勢ひの末なればとて、城山の麓にて葬礼し奉る。」

- 12) 『本光国師日記』慶長十七年八月二十五日条「...仍ち相国寺末寺東山慈照寺の儀、御存知の如く今度迄、龍山様御借り候而御座候。...」。(龍山様 = 近衛前久)
- 13) 『鹿苑日録』慶長二十年閏六月十七日「早朝赴東山慈照寺、朝者宮木丹波殿見講、晩者明叟藏主見設暮烟、丹波再建慈照古寺、鑿池水掃庭除、梵宇一新、々奇可觀。」
- 14) 『元文三年四月慈照寺修理願付図』文部科学省国文学研究資料館蔵  
『宝曆五亥年五月絵図』慈照寺蔵  
『寛永二年総境内坪数并諸建物之絵図』慈照寺蔵  
『嘉永四年境内建物方除図』
- 15) 西田直二郎「銀閣寺西指菴遺址」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第十二冊 京都府 1931年
- 16) 京都府教育委員会『国宝慈照寺東求堂解体修理工事報告書』 1965年
- 17) 慈照寺『史跡 慈照寺(銀閣寺)旧境内保存整備事業報告書』 1989年
- 18) 前田義明・梅川光隆・吉崎 伸「慈照寺(銀閣寺)境内」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 19) 南 孝雄・百瀬正恒・清藤玲子「特別史跡特別名勝慈照寺庭園」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年  
南 孝雄「銀閣寺の発掘調査」『リーフレット京都』 86 (財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 1996年
- 20) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 21) 鳥羽離宮跡第88次調査で同文様の白磁壺片が出土している。  
吉崎 伸・鈴木久男「鳥羽離宮跡第88次調査」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985年
- 22) 大覚寺『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告 大沢池北岸域復原整備事業に伴う調査』 1997年
- 23) 平成6年(1994)2月1~9日、(財)京都市埋蔵文化財研究所が実施した。1993年調査とともに註19)文献で報告されている。
- 24) 註14)と同じ。
- 25) 「元文三年四月慈照寺修理願付図」『日本建築史基礎資料集成 十六 書院』中央公論美術出版 1971年

# 圖 版

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	しせき じしょうじ (ぎんかくじ) きゅうけいだい							
書名	史跡 慈照寺 (銀閣寺) 旧境内							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2003-1							
編集者名	高橋 潔・近藤知子							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2003年7月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせき じしょうじ 史跡 慈照寺 (ぎんかくじ) きゅうけいだい (銀閣寺) 旧境内	きょうとしききょうく 京都市左京区 ぎんかくじちょう 銀閣寺町	26100	A305	35度 01分 25秒	135度 48分 03秒	2003年3月 3日～2003 年6月10日	97.2㎡	境内整備 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡 慈照寺 (銀閣寺) 旧境内	寺院	平安時代後期・ 室町時代後期・ 江戸時代初期・ 後期	石積、溝、石列、 土塁、石敷、柱穴、 中門遺構、土壇	土師器、瓦器、輸入陶 磁器、瓦		史跡 慈照寺 (銀閣 寺) 旧境内の創建時 に関する石列・石敷 遺構を検出した。さ らに先行する浄土寺 の遺構と考えられる 平安時代後期の石積 遺構を検出した。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-1  
史跡 慈照寺 (銀閣寺) 旧境内

発行日 2003年7月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 075-256-0961